

全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタス

第33号 2004.3.31
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会
編集／ふるきゃらネットワーク
〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202
TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



昭和5年福岡県星野村鹿里にて。

原点のそのまた原点 棚田

— 国際コメ年に寄せて —

国際コメ年日本委員会会長
東京大学名誉教授

木村尚三郎

地球上に生きる60億人の人びとのうち、半数以上がコメを主食(ステープル・フード)としており、コメほど飢餓の解消、栄養不足の補填に役立つ食材はない。との観点から、国連は今年を国際コメ年とし、「ライス・イズ・ライフ」(コメは命)を合い言葉に、コメの重要性を再認識するよう世界にアピールしている。その日本委員会も、本年1月20日に立ち上がった。

確かにごはんほど栄養豊で、しかもおいしい食材は世界にない。「コメと塩と水」さえあれば、人間生きていける。この優れた特性を十二分に認識していたからこそ、私たちの先祖は平野のみならず山をも丹誠こめて耕してきた。そして汗と知恵と美意識のすべてを注ぎこんで、棚田(千枚田)の一つ一つを作り上げていった。

日本各地に存在する文化遺産としての美しい棚田の存在は、国連のいうコメの重要性、大切さに日本人が早くから気付き、コメ作りに不向きな土地においてこそ、園芸とも云うべききめ細かさを營々と發揮してきた証しだ。棚田で発揮してきたこのきめ細かな感覚と美意識が、わが国における故障の少ない、精緻な、信頼度の高い、工業生産の根底をも形づくってきた。

最近におけるBSE(狂牛病)とか鳥インフルエンザ、豚肉も危ないという世界的な傾向のなかで、コメを中心とした日本型食生活に新たな光があたれつつある。各地域の食材と新たな味覚を生かした、地産地消の新ごはん食、新郷土料理の創造に努めるときがきた。とともに、日本文化の原点をなす稻作、そのまた原点である棚田での、コメ作りと「棚田ごはん」「棚田むすび」を、心と身体にとっての元気の素、友だち作りの素としたい。

さらに、「きみは棚田を見たか!アジアの原風景・棚田体験展~国際棚田フォーラム~」(主催:ふるさときやらばん・棚田学会・全国棚田(千枚田)連絡協議会他)のように、アジアや世界でのコメ作り、棚田地域との、文化上・稲作技術上の交流と連携をも、官民あげて図っていきたい。

前号32号のトピックスで、佐賀県において、棚田のある市町村がネットワークを組んだ「さが棚田ネットワーク」(<http://www.pref.saga.jp/hourin/nousonkeikaku/tanada/>)について、佐賀県農村計画課さんの方からご紹介いただいた。県が事務局となり、棚田を有する市町村がネットワークを組んだのは、全国でも初。こうした情報を受け、今後、市町村の合併が進められるなか、都道府県との連携も重要な要素になってくるであろうことから今回の特集を組むことにした。

ライステラスでも以前18号(2000年、6月30日発行)で「棚田保全、都道府県の取り組み」を特集した。ここでは「棚田地域等緊急保全対策事業」及び「棚田地域水と土保全基金事業」実施の詳細を紹介した。そこで、今号はそのアンケートからアンケート回答を得て、都道府県レベルでの棚田保全は、ハードでの整備もしかし、「基金」の運用で、全国さまざまな支援が行われている。今回、紙面の都合もあり、一部の県の紹介にどどまっていることをお許しいただきたい。今後、基金による活動も紹介していきたい。

一方、インターネットで各都道府県のホームページを開き、棚田保全の動きを探つてみるのもおすすめだ。日本の棚田百選認定以来、「わが県の棚田」として、棚田のある市町村や棚田百選の棚田が紹介されている。棚田保全の活動が紹介されるところもある。みなさんの住んでいる都道府県のホームページは、いかがだろうか。

特集

全国府県レベルで 都道県レベルで 棚田保全進行中!



棚田は「ふるさとの原風景」とも言われる農山村の美しい風景を形づくるだけでなく、防災面や環境面でも大きな役割を担っていますが、兵庫県においても、農山村の過疎化や高齢化などにより、棚田を守っていくことが次第に困難となっています。

このため、兵庫県では、平成9年度から、県土の保全や水資源のかん養、さらには、農山村の景観の形成といった公益目的機能が高く、今後とも保全すべきと考えられる棚田126カ所を「棚田保全地域」として指定し、集落の棚田保全推進活動への助成や簡易な基盤整備などの支援策を実施してきました。

また、

その一環として、農山村だけでは守ることが難しくなっている棚田の保全活動を

ボランティア
棚田交流人
H9~

棚田国際協力
フォーラム

兵庫県

農村環境課

ランティア「棚田交流人」の育成を進めおり、現在、600人余りの棚田交流人が、県下の20カ所の棚田で農作業や草刈に汗を流すとともに、地元の人との交流を深めています。

ところで、昨年の9月には、世界遺産に指定されているフィリピン・イフガオ州の棚田保全活動を支援しようと、国際協力事業団(JICA)兵庫国際センターなどの招きにより、イフガオ州知事ら4名が兵庫県に来られました。その際、棚田百選に選ばれている加美町岩座神と西脇市の北はりま田園空間博物館で棚田とともに、神戸市において棚田国際協力フォーラムを開催しました。

この交流を通じて、遠く3000km離れた2つの棚田の共通点・相違点を紹介し、棚田の重要性を認識し合うとともに、同じコメ文化である日本文化とイフガオ文化についても理解を深めるなど、非常に有意義な交流が図れたところです。

今年は「国際コメ年」であり、棚田とコメは切っても切り離せない関係にあります。

これを機会に、棚田の重要性をもう一度見直し、国民に広くPRしていくことが必要ではないでしょうか。

(兵庫県農林水産部農林水産局農村環境課 課長補佐兼地域政策係長 奥田邦清)



静岡県
棚田等
十選



しづおか
棚田
くらぶ

静岡県

農村計画室

■ 静岡県棚田等十選の選定
静岡県では平成11年度、棚田のほか段々茶園やわさび田を含めた「静岡県棚田等十選」を認定し、保全活動を通じた地域づくりへの取り組みを開始しました。

■ ボランティア組織 「しづおか棚田くらぶ」の設立

支える組織としてボランティア組織「しづおか棚田くらぶ」を立ち上げ、「十選」認定地区のうち主として3地区で活動しています。(会員数約240人)

各地区的活動内容

「しづおか棚田くらぶ」の支援地区の活動を紹介します。
▽松崎町石部・伊豆半島の西海岸に位置する同地区では、荒廢田を復元し、地元民宿等と連携して14年度から棚田オーナー制度をスタートさせました。東京、横浜などから多くのオーナー希望があり、地域の活性化が期待されます。
▽菊川町倉沢・茶の産地である同地区では、緑の少年

団や県外企業なども参加して保全活動を行っています。活動は年々活発化し、田植えや稲刈りには一般市民も含めおよそ300人が参加します。
▽天竜市大栗安・天竜美林で有名な同地区では、地元中学生なども参加し、田植えや稲刈り収穫祭を行なっています。参加者には郷土料理も振舞われ、楽しく交流が行われます。

■ 棚田を活かした地域活性化の方向

今後とも、地域の特性に合わせ棚田を活かした地域活性化を支援して行きたいと考えています。

▽「棚田」をきっかけに都市住民を呼び込み、他の作物や森林の管理にも助力を求める、地域農林業の継続へ……。

▽小学生の総合学習の場、企業の研修の場などの活用もあり、地域農業に理解を進めるとともに交流により地域がにぎやかに……。
▽地域資源である「棚田」を活かし、観光と結び付いた新しい「ツーリズム」による地域活性化を……。

■ 浜名湖花博に棚田を出展

くらぶ員の方々と協働で、本年度開催される「静岡国際園芸博」に手作りの棚田を出展します。是非見に来てください。

(静岡県農山村計画室 岡あつし)

ECHIGO
棚田
サポーター



本格的作業・
年間交流へ

新潟県

農村環境課

けに、こうした情報がうまく行き渡る。

16年度は、10市町村12地区24回の活動を行う予定だ。県の方で「棚サボ」システムを使ってみないか、と市町村へ声かけ目を迎える。現在会員数568名。最近は、道普請や用水路修理など作業がますます地域密着化、いわば本格化してきた。

県の担当者は「最近は、地元の方々が棚サボの使い方をわかつてきましたね。最初は遠慮があつて……。いまは、道普請でも長さ2m、130kgもあるコンクリートのU字溝を運ぶなど、サポーターも地元の人と同じですよ」と話す。このU字溝、実は平坦地では場整備をした際に出た中古品の無償譲渡・再利用である。

会員に県農地事務所のスタッフが多いだけ現地集合現地解散であるが、会員は回を重ねるごとにそれぞれ、地元に知り合いができるなど愛着のある地域ができるだけそうだ。ECHIGO棚田サポーター問・申・新潟県農村環境課 TEL 025-280-5367 (直通)

「棚田保存の
つどい」から



各自治体
支援中心
に

岡山県

農村振興課

岡山県は、平成9~14年まで「棚田保存のつどい」(地域環境創造実践活動推進事業の一環)を開催してきた。これは、棚田保存のPRも兼ね、草刈りなど支援活動も行う「食のふるさと農業体験研修」として、県内全域で実施してきたものだ。現在は次なるステップへと移行し、県振興局単位での研修へと姿を変えている。

平成15年度は、棚田地域水と土保全基盤の運用益でカレンダーを作成したほか、かつて棚田保存のつどいを行った2地区へ20万円ずつの助成が行われている。1年で終わらせず、2年継続して支援し、定着させていきたいという。こうした支援費は、イベント開催や体験ツアーの実施、休耕田への景観作物の植栽等、それぞれ地域で棚田保全の取り組みに使用されている。

「栃木
棚田めぐり」
発行



「残したい
栃木の棚田
21」選定

栃木県

農村振興室



上：茂木町石畑の棚田
下：茂木町竹原での棚田
保全ボランティア

「栃木の願いは地域活性化ですよね。地域活性化のためには、人が集まる交流が大事だと思います。そのため、棚田をはじめ地域資源を保全し、活用してもらいたいと思い、支援を考えています」。

栃木県では、平成14年3月に「栃木の棚田めぐり」という冊子を発行した。今年早々には、最新版が出された。これは、中山間地域等直接支払制度や日本の棚田百選により、地域での棚田保全の取り組みが活性化してきたことを受けて作成したもの。

しかも県は同時に「残したいとちぎの棚田21」を28ヶ所認定している。地元推薦で、候補は40地区あつたというが、評議委員によつて、景観および地域保全活動の取り組み等が検討され、残すべき棚

田として認定された。現在は、認定棚田の脇には、県で用意した杭と看板が立てられている。

そして「いまはもう、情報提供から積極的な実践の段階」と担当者が話すように、平成15年は県主催で、茂木町竹原地区において「棚田保全ボランティア」が行われた。さらに、棚田保全や農村を支えるボランティア活動をコーディネートするボランティア組織（県庁HPインターネット放送局「とちぎのいちおし」内で活動紹介、とちぎ夢大地応援団）の設立も検討が進んでいる。

県担当者は話す。「一番の願いは地域活性化ですよね。地域活性化のためには、人が集まる交流が大事だと思います。そ

のため、棚田をはじめ地域資源を保全し、活用してもらいたいと思い、支援を考えています」。

「栃木の棚田めぐり」入手希望の場合は、切手200円(1部)を添えて、〒320-8501宇都宮市塙田1-1-20 栃木県農村振興室中山間地域担当係へ申し込みを。

鳥取棚田
ファンクラブ
から

とっとり
農山村ファン
クラブへ

鳥取県
地域自立戦略課

県が声かけし、平成10年に発足した「鳥取棚田ファンクラブ」だったが、平成14年から「とっとり農山村ファンクラブ」へと姿を変えていた。従来以上に作業を重視し、棚田に限らず、渓流など山村の資源を保全していくこうという動きが生まれ、刷新された。

平成15年度は県内24地区でのべ60回活動支援を行つた。棚田地域である岩美町横尾地区での水路掃除のほか、また渓流での草刈りやイノシシ防護柵張りなどの活動である。作業重視で作業時間も増え

ふるさと
棚田支援
事業



棚田保全
団体へ直接
支援

長野県

農村整備課

長野県には、直接県内の棚田保全団体を支援する仕組みがある。これは平成9年度から行われ、長野県内で棚田保全活動を実施しようとする団体（3名以上）を対象に、上限100万円の事業費の半分を補助するというもの。団体は、HPなどでも広く募集され、直接、住民に情報

が入るようになっている。長野県は、農業に限らず広い分野においても県内NPO等の活動へ積極的な支援を行つてている。平成15年度に支援を受けた「よこね田んぼ保全委員会」では、パンフレット作成の助成を受けたという。そのほかは簡

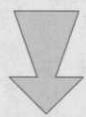
単な整備のための資材購入や施設管理機器などへの助成を受けている。

また、農村保全リーダー育成事業として研修会が毎年1回「棚田保全」をテーマとして行われている。平成15年度は棚田地域において、現地視察を兼ねて行われた。参加者は、ふるさと水と土指導員のほか、棚田保全活動団体や市町村など。ここが情報交換、ネットワークづくりの場にもなる。活動資金やネットワークが少ない地元団体にとって、県とダイレクトにつながることで、活動に広がりと継続性が見えていくようだ。

たが、会員は現在約140名で、大学生から定年退職後の方まで世代をこえた地域資源の保全活動が展開されている。

現在は活動への参加募集をはじめ、送迎手段の確保などは、受け入れ市町村や地域が主体的に実施しており、活動に参加する側と受け入れる側とが自主的に結びついた活動へと発展しつつある。とつとり農山村ファンクラブ問・申・鳥取県地域自立戦略課TEL..0857・2

**全国初
千枚田
オーナー制度**



**ハード・
ソフト面も
確実に**

高知県

耕地課

高知県では、急峻な四国山脈のふところに多くの水田があり、中には勾配が1/2~1/3といった棚田も存在する。棚田が存在する山間地域では、過疎化・高齢化が進み、耕作放棄地は、県全体で平成7年度1536haから平成12年度2225haと年々増加傾向にある。

このため、国土保全や水源涵養等の観点から、棚田の保全対策を図るため、ソフト面では、基金を活用した保全活動の啓蒙・啓発への支援、また、ハード面では、平成9年度より棚田地域等保全整備事業等を実施している。

こうした棚田の保全対策に関しては、中国四国管内でも実施した棚田地域等保全整備事業等の地区数の20%を本県が占めており、棚田の保全対策に積極的に取組んでいる県の一つである。

○地区の紹介

ここで、ソフト面では『棚田オーナー制度』、

○『千枚田オーナー制度の概要』

神在居では、地域の過疎化・高齢化と米価格

【施工前】

【施工後】

の低迷で、作り手がい

なくななり、耕作放棄地の増加をまねき、千枚

田は存続の危機を迎えていた。経済的にみた場合、千枚田における

稻作はとても成り立たない。この状況を少しでも改善するために、都市に暮らす人々に呼びかけ、千枚田のオーナーとなつてもらひ、

ハード面では『棚田地域等保全整備事業』を実施している梼原町「神在居(かんざいこ)地区」について紹介する。梼原町は、高知県中西部、四国山脈の中心部に位置し四国カルストで愛媛県と接している。その総面積は236km²で、標高は南部の250mから、北部の1455mと高低差が大きい。

神在居の千枚田は坂本龍馬脱藩の道沿いにあり、多くの観光客が訪れている。平成4年度から全国初の『棚田オーナー制度』を実施しており、棚田の保全に一躍をかっている。

このオーナー制度は今年で13年目になりすか

り定着し、農家とオーナーによる交流が盛んで、お互いの親戚のような間柄になつた人も多くいて、県外からこの地域に家族で移り住むオーナーの方々もおられる。

○『千枚田オーナー制度の概要』

神在居では、地域の過疎化・高齢化と米価格

の低迷で、作り手がい

なくななり、耕作放棄地の増加をまねき、千枚

田は存続の危機を迎えていた。経済的にみた場合、千枚田における

稻作はとても成り立たない。この状況を少し

でも改善するために、

都市に暮らす人々に呼

びかけ、千枚田のオーナーとなつてもらひ、

財政的な負担を負つてもらうとともに、山村の存在価値を理解してもらおうと企画したのが千枚田オーナー制度である。費用については、四十川の源流が町内を流れていることにもなっており、年間40010円/アール(四十円)となつてある。

**とやま棚田
ネットワーク
保全活動へ**

富山県農林水産公社

富山県

平成13年11月に発足した「とやま棚田ネットワーク」(会長 広瀬慎一・富山県立大教授)。現在、会員は443名になった。会員のなかには富山県立中央農業高校の「棚田を守り隊」の生徒、卒業生も入っている(ライステラス27号)。

16組から28組と増え、うち大阪府2組、兵庫県16組等となつてある。またハード面では、町において平成13年度より棚田地域等保全整備事業を実施しており、簡易な場整備はじめとし、農道・用排水路の改修を行い、ソフト・ハード両面から棚田地域の保全の取組を行なつてある。

○『棚田地域等保全整備事業』

本地区では、ほ場整備0.3ha、農道190m等の整備を行うことで、営農労力の節減、農作業の効率化を図っている。また、整備する際には、棚田の景観に配慮し、現地発生材(石)を利用した石積で復旧するなどの景観対策も行なつてある。

ここで、ソフト面では『棚田オーナー制度』、

○『千枚田オーナー制度の概要』

神在居では、地域の過疎化・高齢化と米価格

の低迷で、作り手がい

なくななり、耕作放棄地の増加をまねき、千枚

田は存続の危機を迎えていた。経済的にみた場合、千枚田における

稻作はとても成り立たない。この状況を少し

でも改善するために、

都市に暮らす人々に呼

びかけ、千枚田のオーナーとなつてもらひ、

保全の取り組みがサポートされている。

会の年会費などなく、活動費は県の支援によるものだ。年2回の会報誌配布のほか、会員

を対象に年1回の交流・研修会を行つてある。

平成14年の活動は、八尾町、婦中町への棚田見

学・研修。平成15年には、利賀村で開催されて

いる「みんなで農作業の日」の棚田保全活動に

ネットワークの会員30名ほどが参加した。みん

なで荒廃した棚田の復元として、そばの種撒きを行つた。

今後は、「地域会員による棚田保全の自主活動を推進する目的で、リーダーの育成研修にも力を入れていきたい」と事務局を受け持つ富山県農林水産公社の担当者は話す。

富山県は、氷見市の棚田オーナー制度をはじめ、八尾町の「みのり棚田の学校」での田植え・稲刈り体験学習、利賀村での荒廃地の復元作業など各地で特色ある棚田保全活動をしている。

こうした各地の関係指導機関とも連携しながら、

保全の取り組みがサポートされている。

農林水産業に関連する文化的景観を保護していくために

文化庁文化財部記念物課
真

○はじめに

近年、農地・林地が環境保全及び災害防止などに寄与していることが注目され、各地で棚田・里山など農林水産業に関連する文化的景観（以下、「文化的景観」という）の保護に関する取り組みが進みつつあります。

若者パワー① 棚田環境大学'03

このコーナーでは、棚田保全活動をしている若者たちを紹介します。

2002年初夏、棚田を介し若者のネットワークを作りたい、という目的で棚田環境大学（以下、棚大）は結成されました。棚田サミットに参加して会を若者なりに盛り上げるということや、そのために棚田サミット開催に向けて開催地の農家の方々と交流していき、農を学び地域活性に貢献したいということが実際の活動です。

棚大'02の活動は、鴨川大山千枚田で棚田サミット期間中の2日間だけでしたが、棚大'03は、4月から坂折棚田で農作業を手伝いながら地元の方と中部・関東地方の大学生が関係を深めることを重要視して行いました。

まず、3月に恵那で顔合わせを行い、その後、月一ペースで週末に恵那坂折棚田で集い、民泊させていただきました。棚田での農作業のお手伝い、お世話になっている農家の方との会話、深夜まで続く学生同士の棚田に関する語り合い、朴葉寿司や権現山の岩など地元の地域資源を肌で感じ、田植えをした稻が育つにつれて皆が坂折棚田に溶けこんでいきました。

そして、9月5、6日の棚田サミットを迎えることで、棚大とはどういう団体なのか、私たちが約半年坂折棚田に通って何をしてきたのか等を発表させていただきました。棚田サミット終了後からは、坂折棚田で地元の方々との交流会を開き、夜は地元農家宅に2~3名ずつ民泊させて頂き、各農家宅でそれぞれ交流を図りました。

7日前には、坂折棚田保存会と恵那市役所、そして私たち学生との「意見交流会」を行いました。そこで、坂折棚田での都市農村交流のあり方や、地域活性化のための坂折棚田の活かし方について意見交換が行われました。午後からは「勝手に式百十日祭！」を行い、地域文化・風習をゲーム感覚で復活させて、文化・風習というものを考えてみました。

このように、棚大'03は約半年に渡り、坂折地区の方々とゆっくりと時間をかけて交流を行ってきました。

棚大'02~'03を経験した今、規模や機能・モチベーションは様々ですが、ネットワークは存在していて、今後さらにそのネットワークが大きくなっているかもしれません。しかし、棚大メンバーの多くはほぼ関東在住者であること、また世代交代がうまくいっていないこと等、様々な課題が残されています。棚大'03で感じたことは、開催県および開催県付近の若者が交流しに来てくれる生産者の方達も嬉しそうということでした。なので、毎年開催地周辺の若者が棚田サミットに参加してくれることを望みつつ、私たちもできる限りのことはしていきたいと思います。

（棚田環境大学 大澤由紀子、長坂卓紀、渡辺淳一）

○調査の経過

所在調査によつて確認した2311の「文化的景観」の地域の中から、独特の性質・構成要素が認められ価値が高いもの、近年の改変による大規模な影響を受けず本質的な価値を伝えているものなど、502の地域を対象として二次調査を行いました。

○「文化的景観」の保護の方法

保護を講すべき地域の中には、現状の制度の下に史跡名勝天然記念物として指定できるものもありますが、その多くは地域に固有の風土的特色を表し、我が国の歴史上・

していることが多く、適切な規制の下に支援が可能となるような面的な保護制度を導入することが最もふさわしいといえます。

また、「文化的景観」は多数の所有者から成る広大な土地に展開するものについて強い規制の下に保護を行う従来の指定制度では対応しきれないものです。

学術上・芸術上・観賞上価値が高いものについて強い規制の下に保護を行う従来の指定制度では対応しきれないものです。

れ対し国が必要に応じて支援を行う制度を新たに創設できるよう文化財保護法の所要の改正について検討すること、が提案されました。

○その後の展開

上記の調査研究の「報告」については、「月刊文化財」平成15年9月号（第一法規出版）において特集を組んでいるほか、文化庁のホームページ（<http://www.bunka.go.jp>）でも全文を配信しているので参考してください。現在、文化庁では、「報告」を受けて文化財保護法の改正について慎重に検討を進めているところです。

〔棚田学会通信12号〕より転載

告知

日本橋三越本店を会場にした棚田体験展は、

今度で2回目となる。

第1回の体験展は

99年、棚田というものがほとんどの都会人に知られて

いない中で開いた。首都東京のド真ん中で、まるで棚田の前に立ったような臨場感のある大型写真を、しかも灯入れで浮かびあがらせた。

都会の人々にとって、初めて

観る日本の棚田の美しさは衝撃的であった。そして主要なテレビも新聞も、大きく数回ずつ報道してくれた。棚田が頻繁に雑誌や新聞やテレビに登場するようになつたのは、それからである。

その時のタイトルも「きみは棚田を見たか!」であり、初めて観る人たちに棚田のもつ美しさと、迫力と、日本人としての原風景との出会いを体験してもらうべく「体験展」としたのである。

2回目となる今回の棚田体験展は、景観の美しさだけではなく、まるで体験してもらおうと考えている。

例えば、棚田を観光資源として活かし、成功しているインドネシア・バリ島の棚田であるとか、世界遺産として認められたフィリピンのイフガオの棚田である

アジアの原風景。棚田体験展

新たなるアピール 石塚克彦

ふるさときやらばん脚本・演出家

8月10日(火)~15日(日)日本橋三越本店7階ギャラリー・屋上

主催:ふるさときやらばん・棚田学会・全国棚田(千枚田)連絡協議会他



インドネシア・バリ。撮影・青柳健一

とか、その棚田を守るために日本からも現地に出かけ協力しているボランティア活動であるとか、

また日本の棚田も、棚田特区第一号として、棚田に都会の人々を呼びこみ地域の活力を取りもどそうとしている千葉県・鴨川市の棚田。

農林課ではなく観光課が棚田の保全に取り組み、観光と棚田の結合に努力している石川県の輪島市の例。

3年にわたる棚田学会員による民俗調査の結果、新たなる棚田の奥ゆきにスポットが当たる福岡県・星野村であるとか、豪雪と付き合い、雪を活かした棚田耕作の知恵に驚かされる新潟県・安塚町の棚田。

現在も棚田の復田がおこなわれ、近くに点在するすぐれた棚田群と合わせ、田園的博物館の様相を呈している佐賀県・相知町とか、第1回の名勝指定となつた「田毎の月」で有名な千曲市の棚田など、生きている棚田や奥ゆきのある棚田の深さを掘りさげて、体验してもらおうという訳です。

しかも、今回の展示場は国際コメ年ということもあり、三越100年記念ということでも重なつて、三越本店の中でもメインの会場です。大いに期待して下さい。そしてその成功のため協力して下さい。

近頃ニュースで話題になつてますが、鳥インフルエンザやBSEなど「食」に対する不安も広がり、また自然環境保全に対する国民の意識もますます高まっています。

今年平成16年は、国連の定めた「国際コメ年」であり、また米政策改革がスタートする年でもあり、そして、記念すべき第10回目の棚田サミットも開催されます。なかと暗いニュースが多いなか、米や田、そして棚田がこれだけ注目される年はな

いかと思われます。

「国際コメ年」は、2002年12月の国連総会において決定されました。これを受けて、国内では国際コメ年日本委員会が設立されています。

——「ice is life」

という明快なメッセージの下、世界各国の人々とともに、「コメは命」としてコメの重要性を訴える——

こうした趣旨に賛同し、棚田連絡協議会も一員として、委

事務局

ニュース

事務局、千葉県鴨川市からのお知らせコーナーです。

員会の活動に取り組んでいます。そのイベントの一つとして、8月10日~15日に東京の三越で「アジアの原風景・棚田体験展」が開催されます。この体験展を通して、棚田の偉大さ、役割を都部の子どもたちや大人をはじめ国民的な理解へと更に拡げていきたないと考えています。

そして、もうひとつ大きなイベントが記念すべき第10回目となる棚田サミットです。今年は9月3日~4日に蕨野の棚田で有名な佐賀県相知町で開催されます。体験展とあわせて、こちらも全国各地からご参加いただきたいと思います。

この1年間事務局を担当させて頂き、会員の皆様方から貴重なご意見ご要望を頂きました。また、いろいろな情報もお寄せ頂きました。お蔭様で、微力ながらも円滑な活動ができたものと思います。

なお、4月からは事務局が岐阜県恵那市0573-261-2111に変わります。今後ともよろしくお願いいたします。

事務局からのお願ひ

協議会の会費はもう納入されましたでしょうか? 納入されていない方はお早めに納入下さいます。また、住所、氏名等変更があります。また、住所、氏名等変更がございましたら、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

第10回全国棚田(千枚田)サミット・ニュース

2004年9月3日(金)~4日(土)

佐賀県相知町にて開催

蕨野の棚田を歩き、棚田保全とコメの大切さを考えよう

1995年(H7年)9月、日本で初めて棚田保全を目的とした全国サミットが高知県梼原町で開催され9年の月日が経ります。サミットでは、棚田の美しい景観美や国土保全など公益的機能を広く国民に理解してもらいたい、そしてなにより、急峻な山肌や丘陵地に田を拓き、主食であるコメを作ってきた先人の努力と苦労を未来へ引き継ぎたいという強い思いが語られ、「中山間地域等直接支払制度」などの制度・事業の創設に繋がっていきました。

そして今年、佐賀県相知町で開催されるサミットは10回目という節目を迎えます。メインテーマとして、「棚田保全活動のこれから展望」を話し合つとともに、「コメの果たす重要な役割」について考える場としていました。

サミット開催の成果の一つである「中山間地域等直接支払制度」は、本年までが一つの区切りです。

第9回サミットでは、制度継続希望もさることながら「農地維持など守りの制度」から「各種事業を展開する攻めの制度」へという積極的な制度改善の方向性が打ち出されました。そこで、

棚田保全における「攻めの戦略」をどのように進めていくべきか、協議したいと思っています。また、日本の食糧自給率が40%と伸び悩んでいる一方で、おびただしい量の食べ物が残飯として捨てられている現状があります。この矛盾について、日本の農業と食の観点から議論を深めるとともに、日本の主食であるコメの役割と棚田について、メッセー

ジを発していかねばと思います。

棚田見学では、日本一の高石積みをご覧いただくのはもちろん、参加者の皆さんに棚田ウォークを体験していただきこうと棚田が一躍脚光を浴びるようになつたきっかけは、棚田ウォーキング大会でした。過去3年間では、それぞれ約1000名の参加者がいる人気のイベントです。

皆様にも大会の雰囲気を少しでも味わっていただけたらと考えています。

開会式、分科会会場には十分な設備がなく、暑い中、参加者の皆さんにはご迷惑をおかけす

ることが多々あるかと思いますが、ぜひノーネクタイ、歩きやすい服装でお越しください。

(相知町農林観光課 島松県祐)

棚田保全における「攻めの戦略」をどのように進めていくべきか、協議したいと思っています。また、日本の食糧自給率が40%と伸び悩んでいる一方で、おびただしい量の食べ物が残飯として捨てられている現状があります。この矛盾について、日本の農業と食の観点から議論を深めるとともに、日本の主食であるコメの役割と棚田について、メッセー

ジを発していかねばと思います。

棚田見学では、日本一の高石積みをご覧いただくのはもちろん、参加者の皆さんに棚田ウォークを体験していただきこうと棚田が一躍脚光を浴びるようになつたきっかけは、棚田ウォーキング大会でした。過去3年間では、それぞれ約1000名の参加者がいる人気のイベントです。

皆様にも大会の雰囲気を少しでも味わっていただけたらと考えています。

開会式、分科会会場には十分な設備がなく、暑い中、参加者の皆さんにはご迷惑をおかけす

ることが多々あるかと思いますが、ぜひノーネクタイ、歩きやすい服装でお越しください。

(相知町農林観光課 島松県祐)

お便りテラス

ポストカード
「遺産」「日本の棚田Ⅰ
およびⅡ」を作製しました
長崎県の片田舎で育った私は農村風景に心惹かれ、全国の農村を訪ね撮影をつづけています。カメラを通して農村を見つめているとの変化が激しいことに気がつけます。

中でも山ふところにある棚田の多くが放棄され、山に帰っていく姿に不安を感じていたのです。そうした折りの1999年、朝日新聞ひとの欄学者石井進さん」を読んで棚田学会の存在を知りました。

棚田学会に入会した後、全国棚田サミットへも参加するようになり、棚田の多面的な機能やその存在意義を学ぶによんと、先祖たちが嘗々と築いたこの風景は私たちだけのものではなく、将来における子々孫々たちのものもある、ということが信念となつたのです。

全国に残存する棚田は少なくなつてはいますが、その現役の姿を多くの方々に見ていただきことによって、棚田が将来にわたつても現役であり

つづける道が開けるのではないかと考えるようになりました。撮影熱も一段と高くなりました。このたび撮影した作品の中から18点を選び、ポストカード「遺産Ⅰ」「およびⅡ」を作製しました。各カードには「先祖が築いた原風景 子々孫々へ届けよう」と記入しました。

皆様にはポストカードの主旨をご理解のうえ、お便りにご使用いただけます。多くの方々に棚田の存在を広めていただければ有り難いと考えています。(棚田学会会員 永田博)

■ 遺産 日本の棚田Ⅰ+「日本の棚田Ⅱ」+「遺産Ⅰ」「日本の棚田Ⅱ」+送料=100円
お申込みは、FAXまたはハガキにてお願いします。
FAX:047-345-4483
戸市小金原6-7-8-304 千葉県松
義 戸市小金原6-7-8-304 永田博



日本原風景である棚田に思いを寄せて棚田ふれあいコンサートを開催

「棚田ふれあいコンサート」を3月3日に中野ZEROホールで開催いたしました。この企画は、棚田保全の啓発・普及を目的とし、参加者は棚田関係者だけではなく、鹿児島県出身の方々をはじめ、あらゆる業界で活躍の皆さんや学生にお声掛けして、会場はほぼ満員、立ち見も出る程の大盛況でした。

第1部早稲田大学教授、中島峰広先生の講話は実にわかりやすく、30歳の棚田を開拓するのに100年かかる等の解説に感動を覚えました。お話を聞いたNPO法人棚田ネットワークによる棚田サポートや猫の手の運動に是非、参加したいとの声も多

新しく会員になったみなさま

個人正会員 里見功二(福岡県苅田町)

編集後記

3月27日に福岡県星野村で、3年間行われた棚田の民俗調査の報告会「星野村の棚田はすごい!」が開催されます。次号で報告したいと思いますが、報告書は300ページを超えるすごいものになっています。今号の表紙は、そんな調査のなかで出会った星野村の古い写真なんと昭和5年で、この棚田の集落は、反収10俵~12俵あったといいますから、これもすごいことです。水が豊富なゆえ、南向きの斜面であり、いち早く耕作されたところのようです。わたし自身も調査で明らかになっていることでしょう。わたし自身も調査のお手伝いをしながら、女性古者の人生や郷土食を聞き取り、書き残す作業を行いました。女性たちは、出産予定日でも山(棚田)へ行き、1時間近くかけて家に戻り、足に痛みがついたまま出産するなど、たくましい人生を生きていらっしゃいました。やっぱりすごい! ありました。

石井里津子



棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田(千枚田)連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
鴨川市農林水産課内

〒296-8601 千葉県鴨川市横瀬1450
TEL:0470-93-7834 FAX:0470-93-7856
協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>